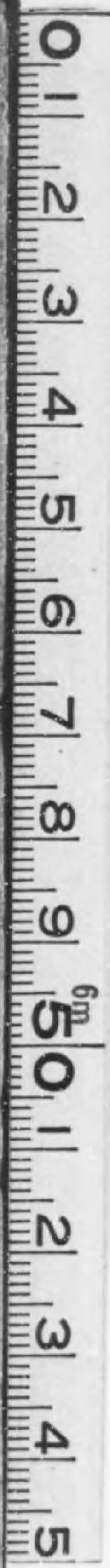


特273

713

年頭の法輪



始



長 273
713

年頭の法輪

一 御修法

新年の御慶御同様御孝出たう存じます、眞言宗では後七日の御修法と申しまして毎年一月八日より十四日迄一周間、今上天皇陛下の御衣を御加持申上げて宮中へ御納めするに成つて居ります是は承和元年正月廿日法大師御在世の時から一千有餘年の今日まで行はれて來ましたもので一月一日から七日迄の間は宮中で種々の神事が行はれますから後七日即ち一月八日より一七日間御修行になります故後七日の御修法と申すのであります昔は宮中に眞言院と申す道場がありました其處で親しく玉體を御加持申

飯泉啓運述

上げたので有りませんが只今では御勅使が天皇陛下の御衣を眞言宗の根本道場たる京都の教王護國寺即ち東寺に御届けになります、眞言宗の各派管長は東寺に集まりまして此御衣を玉體と觀じ一日の間御祈禱申上げ結願になりますと直ちに大阿闍梨が捧持して宮中へ御納めするのであります、本大阿闍梨が捧派管長廣瀬賢信大僧正が大阿闍梨を御勤めした、この法會に參與する僧侶は孰れも前々々戒沐浴して前行を爲し修行中には御勅使も参向いたしましたして最嚴肅に行はれる眞言宗唯一の大修法でありますこの後七日の御修法には何を御祈禱するか云へば無論玉體安穩鎮護國家萬民豊樂を御祈禱する



のであります、されば我が眞言宗僧侶は勿論本宗の檀徒信徒は此間特に 今上 皇帝寶祚長遠國體鞏固萬民豊樂を御祈りしなくてはなりません、この鎮護國家の御祈禱ばかりでは無い凡て人間は祈ると云ふことが無ければ人間としての眞劍味は無いのであります

二 祈 禱

心なき人は神佛を祈つて利益が有るなど云ふことは愚夫愚婦の迷信であると申しますが利益の有る無しは後として先づ祈禱と云ふことは決して迷信で無いのみならず實に人間至誠の顯はれであります、日露戦争の時滿洲軍の總參謀兒玉大將は毎朝小高き丘に登りまして東の方に向ひ熱心に伊勢の大廟を拜して我軍の勝利を祈られ又旅順攻圍軍の乃木大將は常に神籬を立て、神降ろしを爲し皇軍の戦捷を祈ら

我が世を守れ伊勢の大神

とあります、實に有り難き極みではありませんかこの祈る祈禱すること云ふことは信仰心に基くもので凡ての宗教の根本義と云つて差支ないのであります、特に眞言宗は祈禱が特徴で仁和寺の御開山にて在らせ給ふ宇多天皇即ち寛平法皇は金剛頂經念誦次第と申す御祈禱の次第書を御作りなされてあります、此次第書に依つて我々は常に御祈禱して居るのであります、されど祈禱をすること云ふばかりが宗教の全部ではありませぬから己下少しく宗教とは如何なるものかと云ふことを述べませぬ

三 宗 教

宗教にも種々ありますが我國の神道の如きは國家的宗教と申し理想を近きに求めて其國其民族だけの信仰でありますから外國へは弘通出来ませぬ次は佛

れたと云ふではあります、此大信仰大至誠か有つてこそ始めて世界に轟く大勝利を得たのであります、祈りを捧げ神佛に絶する時の精神は凡ての妄想分別を捨て至純赤子の如く至誠鏡の如き心になるのであります、ますれば何とて感應の無き道理がありません、興教大師覺鑿上人は末代眞言行者の用心と申すものを御書き下され、其中に「發何心成就悉地謂有深信者能得悉地何云深信謂久久修行雖不得法驗不生疑慮不生退心也如此人必定成就悉地」と仰せられてあります、必定成就悉地とは必感應ある利益あること云ふことであります、儒教にも至誠天に通すと云ふことがあります、然るに已れは祈ることは嫌ひだとか祈つたことが無いなど云ふ人は心か荒み果て、此至純至誠に立ち返つた事の無い人であります。

明治天皇の御製に

ごこしへに民安かれと祈るなり

教基督教の如き世界的宗教でありまして此は理想を遠大に求めますから世界各國へ宣傳することが出来るのであります、此内基督教は獨一眞神と申して神は唯一神で澤山な神は無いと説き又人と神は飽まで別で人は如何なる修行をしても神には成れぬと説きます、これを神入懸隔教と申します、次に神道や佛敎は人が修行すれば神とも成り佛とも成ることが出来る、神佛と我々は同体であると説きますから是を神人同格教と申します、此の如く國家的宗教、世界的宗教、神人懸隔教、神人同格教、一神教、多神教と種々に分れてあります、或る眞理の大道を信仰して人に此大道に稱ふた生活を送らしめ此理想の眞理に到達せしめやうとする点に至つては同一であります、この世の中の人には誰でも今日現在世に處して居る處の現貨だけでは満足が出来ない必ず何かの理想を要求するのであります、併かし此理想は際限の無

いもので一歩進めば又一歩理想を進めるのであるから道徳教では充分この理想を満足させる譯には参りませぬ、此限りない理想を満足させんとするのが宗教でありますから道徳が進み進んで其極に達すれば宗教と云ふことに成り文明か進展すれば進展する程宗教が必要と成るのであります、世には少しばかりの學識を待んで無信仰無宗教を誇り顔に吹聴する人もあります夫れ等は小さき狭き現實に囚はれて何等理想の無い人であまり賢明なる人とは申されませぬ、鳩翁道話に斯様な話があります「あの蝶螺と申す貝は丈夫な貝で併も頑丈な蓋がある、そこであの蝶螺が何ぞと云ふと内から蓋をビシヤリと締め、これで大丈夫と思ふて居る、すると鯛や鱈が羨ましかり、これ蝶螺やお前の要害は大丈夫である内から蓋をしめたか最後外からは手がさせぬ、さりとは誠に結構な身の上だと云へば蝶螺は髭を撫で、た前

四
方が其様に云ふて呉れるけれど餘り丈夫な事も無い併しまあ斯うして居ればまんざら難儀な事も無いと卑下自慢をして居る時ザブリと音がした蝶螺は急に蓋をしめて熟考考へて居ながら、今のは何であつたか知らぬ網であらうか釣であらうか是だから要害が肝要だ鯛や鱈は捕られたかも知れぬさても心許なき事である、したが先づ己は助かつた、と兎角する内時刻は移り、もう好からうと、ソツと蓋をあげ頭をヌツとさし出して其處等を見れば何となく勝手か違ふ様だよく見れば肴屋の店で「この蝶螺十六文」と正札が附いて賣出されて居たと云ふことであります、餘り偉らくも無い學識やあまり當てにもならぬ財産を積みとして無信仰無宗教を誇りとする人は此學識や財産か却つて地獄の責め苦となつて未來永却安心を得られない夫れこそ十六文どころか三文の價直も無くなるのではありませんか、さりながら理想

にのみ偏して現實を忘れる様な宗教では甚だよろしくない、ある天文學者が熱心に空を仰いて星を見ながら歩るいで居たので足下に大穴のあることに氣附かずアハヤと云ふ間に穴の中へ眞倒大怪我をしたと云ふこともあり語を換へて云へば平等(理想)に即して差別(現實)を見、差別に即して平等を見る、と云ふので無ければ勝れたる宗教とは申されませぬ、然らば眞言宗は如何なる宗教であるか、かい撮まんで少々お話することに致します

四 眞言宗

眞言宗第一の理想目的は即身成佛即ちこの身の儘大日如來に成ると云ふことであります、是はなかく容易な事ではありませぬ、随つて同佛教でも他の宗派では即身成佛と云ふことは説きませぬ、龍猛菩薩の菩提心論の中にも「有大度量勇銳無惑

者宜修佛乘乃至惟眞言法中即身成佛故是說三摩地法於諸教中闕而不書」と御説きなされてあります
如何して即身成佛することが出来るかと云へば我等は元來大日如來である、それを凡天と思ふて居るのは大なる間違である、我等が常に煩惱であると思ふて居るところの欲や愛や瞋や慢は皆大日如來の徳であるから煩惱として捨つべきものでは無い却つてこれを無限に擴大せねばならぬものである、煩惱即菩提生死即涅槃である此理を証得すれば、一切智々を得たる大日如來であるから即身成佛が出来ること云ふのであります、溢柿の甘干しとなる日の力で溢其物が甘くなるので溢を取除けて甘くなるのでは無い煩惱其物が菩提で煩惱を捨て、別に菩提を求むるのでは無い唯淨化すればよいとの意味で即身成佛を説くのであります

第二の理想は浄土往生であります、此は他宗でも説きますが眞言宗では他宗の説く往生浄土とは少々違ひまして即身成佛の出来ぬ機根の者は漸次に修行して密厳浄土に往生し成佛するのであります浄土と娑婆の間を八千返も往來して成佛するのではありませぬ、こゝで注意して頂きたいのは往生と申すことは往き生れると云ふことで死ぬることではありませぬ

第三の理想は鎮護國家であります鎮護國家は眞言宗ばかりではありませぬ浄土眞宗の王法爲本も日蓮宗の立正安國も禪宗の興禪護國も皆同じ意味でありますが眞言宗は眞俗二諦の差別門から云へば成佛の修行と鎮護國家の仕事は自ら別になりませんが二諦不二門の深義から云へば鎮護國家の仕事が直ちに密嚴佛國を成就すると云ふ事になりますからそこに他宗と異なる鎮護國家の眞劍味があるのであります

衆生の代表たる金剛薩埵之を傳へ金剛薩埵は龍猛菩薩に龍猛菩薩は龍智菩薩に傳へ龍智菩薩は御弟子の善無畏三藏と金剛智三藏に傳へました此二人は唐の玄宗皇帝の時支那へ渡りまして盛に密教を宣傳されました、善無畏三藏の弟子には不空三藏が出て不空三藏の弟子には惠果阿闍梨が出てました、此時まではまだ眞言宗とは申しませぬ只秘密教として傳へたのでありますが延暦二十三年弘法大師が入唐して惠果阿闍梨より此秘密教を傳へられ之に一大組織を加へ一宗としての要素を完備せられ純然たる日本佛教としての眞言宗を開宗せられたのであります、依つて 大日如來、金剛菩提、龍猛菩薩、龍智菩薩、金剛智三藏、不空三藏、惠果阿闍梨、弘法大師、を付法の八祖と申上げ 龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、惠果、弘法大師、を傳授の八祖と申上げます、承和二年三月二十一日弘法大師様の高野山

六
す、これを眞言宗では即事而眞と申すのであります、さればこそ此眞言宗が日本民族の信仰と一致して信仰を基としての鎮護國家の鎮護國家を基としての信仰と云はれる迄に皇室中心主義の鎮護國家を高潮する所以であります。故に日本の神祇を信仰する我が國民思想に反したる宗教は慰安向上の爲めには好いが我が國体を永遠に鎮護するには要のないのみならず却つて危険思想を伴ふものであると云ふことを深く注意せねばなりません、終りに眞言宗豊山派の傳來歴史の大略を述べて完結といたしませぬ

五 新義眞言宗豊山派

豊山派の歴史を述べますには順序として先づ眞言宗の傳來から申上げねばなりません、眞言宗は申す迄もなく弘法大師様の開宗であります但其大本の秘密教は大日如來が御説きに成りましたもので我々に御入定遊ばされてから二百七十三年堀河天皇の嘉保二年六月十七日肥前の藤津今の藤津郡鹿島町字誕生院に興教大師様が御誕生遊ばされた、この御方が新義眞言宗の開祖で根來山を開いたのであります、此新義眞言宗に對して 高野派、東寺派、御室派、泉涌寺派、大覺寺派、醍醐派、山階派、小野派の八派を古義新言宗と申すのであります、根來山は興教大師様が御開山なさるてから、賴瑜僧正、聖憲僧正、など偉人傑僧が續出いたしましたして新義眞言の教義を完成せられ學徒雲集して益々隆盛を極め元中年間「五百四十年前」の頃には在山の僧侶六千人諸堂坊舎の數二千七百餘と稱せられましたが天正十三年に至り豊臣秀吉の紀州征伐と云ふ事が起りました秀吉は使者を根來山に送り歸順することを勧めたのであります、此時根來山の方には常住方と客方と二派に分かれて居た關係から議論幾派にも分かれ容易

に決しませぬ其内武士上りの血氣の壯者は其使者に發砲すると云ふ有様そこで秀吉は大に怒りまして純正の僧侶には退去を命じ火を放つて焼打いたしました、この時退去しました玄宥僧正、智積院を京都に移しまして其處で法幢を立てました、これが智山派と申すのであります、も一人偉い御方で根來山の學頭でありました專譽僧正は初め衆僧を連れて和泉の國分寺に退去いたしましたが天正十五年大和の太守豊臣秀長の請ひに依つて大和の豊山長谷寺に移り其處で一派を爲しました、これが新義真言宗豊山派と云ふのでありますから根來山は智豊兩派の總本山で大和の長谷寺は我寺の大本山であります、依て本派は弘法大師様を高祖と崇め興教大師様を宗祖と奉じ專譽僧正を派祖と申上げる次第であります、目下この豊山流の寺院總數は三千十六ヶ寺ありまして三府一道二十二縣に跨り重もに關東地方に分布されて

あります。寺院總體の一ヶ年財産収入は約金壹百拾萬圓で此約十分の一半が本派の立法行政教育傳道等凡て宗治の機關を運轉する宗費課金即ち一流の財政であります、實に貧弱なる財政に加へて我等如き凡僧が多いので思ひながら社會に貢獻する事の微々たるは誠に慚愧に堪えぬ次第であります何卒我が檀信徒諸君は佛教は寺院の佛教でなく檀信徒否社會の佛教でありますから法の爲め國の爲め御力を添ひて下さる様御願ひ致します、終

○新義真言宗豊山派茨城縣第二號宗務支所下有志寺院は去る一月十四日行方郡水原愛染院に會合して文書傳道會を組織し其發會式を舉行せり、會則並に役員左の如し

新義真言宗 鹿行文書傳道會規則

第一條 本會ハ新義真言宗豊山派鹿行文書傳道會

ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ヲ茨城縣行方郡延方村普門院ニ置ク

第三條 本會ハ新義真言宗ノ教義ヲ宣傳シテ思想ノ善導ニ努メ社會ノ幸福ヲ増進スルヲ目的トス

第四條 本會ノ目的ヲ達センガ爲時々文書ヲ發行シ及ヒ傳道上必要ノ施設ヲ爲ス

第五條 本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トス
一 名譽會員 本會ヨリ特ニ推選シタルモノ
二 正會員 本會ノ趣旨ヲ體シ會費ヲ分擔スルモノ

三 贊助會員 本會ノ事業ヲ贊助シ一ヶ年金壹圓以上喜捨スルモノ

第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長壹名 副會長壹名 會計係貳名
傳道係貳名 編輯係貳名 理事若干名

但シ任期ヲ滿三ヶ年トシ再任ヲ妨グズ

第七條 會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理ス 副會長ハ會長事故アルトキ之ヲ代理ス 會計係ハ本會ノ會計ヲ司トル 傳道係ハ會長ノ命ニ依リ傳道ニ従事ス 編輯係ハ會長ノ命ニ依リ文書ノ編輯ニ従事ス 理事ハ會務執行上ノ協議ニ參與ス

第八條 會長副會長ハ正會員ノ互選トシ會計係理事傳道係編輯係ハ會長之ヲ委嘱ス
第九條 本會ハ毎年春秋二回總會ヲ開キ會務ノ經過及會計其他必要ナル事項ヲ議定ス
第十條 本會ノ維持金ハ會費並ニ特志者ノ喜捨金ヲ以テ之ニ充ツ
第十一條 本會ノ細則ハ別ニ之ヲ定ム

附 則
一 本會々則ハ總會ノ決議ニ依リ改正スルコト

ヲ得

以上

○鹿行文書傳道會役員會長、飯泉啓運、副會長田村快全、傳道係高橋鑊海、岩堀法嚴、會計係橋本弘繁井上泰純、編輯係井上信榮、和田吳道、理事關谷峻猛、須口隆範、石井勝道、茅根宥道、菅澤祐光、石津正覺、中島佛山、渡邊祐範

下澤 遍照院報告

釋迦誕生佛一軀並花御堂 寄附者 飯岡松太郎殿

延方 普門院報告

○昨年七月二十五日檀徒總代改選を執行し山野庄之介、香取三次郎、荒原 倉吉、角田大次郎、西山敬一、久保木 繁、石田縫之助の七氏當選せり
尙ほ開基檀頭を顧問と爲し小峰豊次郎、大久保惣左衛門の二氏就任したり

○前檀徒惣代大久保惣次郎、小峰豊次郎、石山榮次

郎、川井甚之介、君和田三平の五氏は大正二年より同十一年迄勤績し功勞顯著なるを以て當院より感謝狀を添ひ記念品を贈呈せり

○紫絹四反幕 壹張 寄附者山野はま、山野いと、香取てい、荒原とら、諸星とら、荒原てい、飯泉しけ、茂木とめ、角田もと、小松崎いし、村井なか、山澤さみ、石田さよ、人見むめ、大崎とみ、宮田ます、今泉しめ、内田せき、志村とし拾九姉

○眞鍮蠟燭立 壹對 東京 秋永幾次郎殿寄附

林 廣愷院報告

○鑿子 一口 價額金壹百貳拾圓

寄附者 長岡篤殿、君和田新之助殿、笠貫清市殿

下幡木 彌勒院報告

○當院檀徒總代古德子之助、額賀辰五郎、石津久藏三氏滿期に就き大正十二年一月改選の結果
石津茂八、横田兼吉、立花嘉吉の三氏當選せり

○觀音堂修繕 當院子安觀音は靈驗顯著にして地方

信仰の中心たるも大破したるに依り今回谷藤彦左衛門、全新右衛門、石津宗左衛門、全喜兵衛、新川善右衛門、古德善八、新川與左衛門、額賀作右衛門、額賀彌左衛門、古德安藏、横田太郎左衛門、藤城藤左衛門の十二氏世話係となり前記總代と協力して大修繕を加ふることに決定し來る舊正月十七日入佛式を舉行することになれり

天掛 觀音寺報告

花崗石々橋工費壹百餘圓 醫師 高須鐵之助殿寄附
杉苗 百七十八本、桐苗、拾五本、吉野櫻、二十本
爲高崎家先祖代々菩提 高崎ひさ殿寄附

水原 愛染院報告

觀音堂前石壇 工費金貳百四拾圓也

皇太子殿下御渡歐記念の爲め

東京 方波見善藏殿 根本辰吉殿寄附

10

鍍金華籠十枚附坐具 全上記念の爲め

根本與一郎殿寄附

觀音巡回用法螺 壹箇 根本與一郎殿寄附

雜報

○中野村大字中寶愷院にては前住職住田惠淨師代檀徒より金壹百參拾餘圓の淨財を得て聖觀世音靈像の大修理を爲し更に昨年七月中現住職菅澤祐光師代に至り金壹百餘圓の喜捨を得て堂宇内外の修理を爲し水引及打敷等を新調したるを以て過般大護摩を修行し參拜者群參せり

○根小屋龍翔寺は數年來堂宇大破の處現住職高橋鑊海師晉住以來大に之を憂ひ檀徒諸氏と相諮かり多額の淨財を得る大修繕を加へ其面目を一新せり

○上戸觀音寺にては昨年中蠶靈神の分靈を勸請し去る三月十三日盛大なる入佛式を舉行せり

11

○當支所常任傳道師岩堀法嚴師は大正八年三月特任住職として平泉萬徳寺に赴任せられ爾來銳意諸般の整理を爲し昨今漸く其任を完ふせられたり

○宗會議員 大正十年九月中豊山派にては宗會議員の總選舉を執行し下幡木彌勤院住職田村快全師最大多數を以て當選せり

○春期傳道 昨年四月二十一日二日の両日中島村大慈院及水原愛染院を會場として春期傳道を舉行し宗務所より巡回傳道師高橋了照師派遣せられ支所常任傳道師も出演せり

○大和村白濱成光寺兼住職井上泰純師辞任し井上信榮師住職となりたるを以て一月二十五日送迎の式典を舉行し參列者百五十名井上老師に記念品贈呈の式辭、全老師の挨拶檀徒總代の祝辭參列寺院總代の祝辭住職井上信榮師の答辭等ありて、近來希有の盛典

○全十月二十六日より二十九日迄講習會を中野村寶徳院に開催し宗務所より特派傳道師東洋大學講師川井精春君豊山大學講師田中海應君の兩僧正を派遣せられ部内寺院一同熱心に講習を了せり

○秋期傳道 全十一月五六の両日に涉り大生原村小學校、全村愛染院、武井洞傳寺を會場とし秋期傳道を舉行す宗務所より巡回傳道師林眞雄師派遣せられ尙支所常任傳道師も出演したり

○鐘樓堂落慶式 延方普門院にては檀信徒を始め十方の篤志者より金六千餘圓の淨財を得て梵鐘及鐘樓堂を建立し昨年五月一日盛大なる練供養を修行したりしが當日は管長御代理として小林正盛僧正來錫せられ式後最有益なる御講演ありたり

大正十二年二月十二日印 刷
大正十二年二月十七日發行

新義眞言宗豊山派
編輯人 鹿行文書傳道會

右代表 飯泉啓運

發行人 田村快全
茨城縣鹿島郡中島村大字下幡木彌勤院住職

印刷人 堀越春太郎
千葉縣香取郡佐原町イ五百九十九番地

發行所 茨城縣行方郡延方村普門院中
新義眞言宗 鹿行文書傳道會

287
422

終

